

は更に多くの年の省かれてあるかも知れないといふ推察を許さぬであらうか、即ち(23), 1, 2, (3)の代りに(23), 24; 1, 2, (3), 或はまた(23), 24, 25; 1, 2, (3)などとも考へ得べきであらう、故に此の二續きの *ksun* の年に決定を與へることは危険だといはなければならぬ』といふてゐる。

要するに此の問題は *ksun* なる語が解釋せらるれば自然に解決の道を見出すべき性質のものである。

次に進むで

Sten Konow, *Khotan Studies* (Journal of the Royal Asiatic Society, 1914)

の紹介に遷る。

氏の資料としたものは、殆んど同一のことを書いた東方イラン語の二枚の文書で、文字は一種のブラーフミー文字を用いたものである、文書の出た場所は判然とは分らないが、和闐附近の Dandan Oiliq より出たものであらうといはるゝものである。氏は此等の文書を最近に知られた此の種の文字の知識で、次の如くに音譯した、

om salī 10 7 (20) māstā skarhvārā (Cvātaja) hadā 5 (10 3) hvān-nā-rruṇ-dā-vi-sa-vā-ham

(括弧中の文字の外は兩文書

とも同文である)

此の中、17 (20) 年、Skarhvārā (Cvātaja) 月、5 (13) 日の日附けだけは解つて居たが、その以下は文字の誤讀などもあつて、尙不明に附せられてあつたのである。Konow 氏は先づ此等の語を解釋して、これが于闐語であることを定めたのである。

『*rruṇ-dā* は能く知られた語で *re* (王) の單數物主格である、*rruṇ-dā* が「王の」といふ意味ならば、自然その